

研究ノート

幼稚園における子育て相談の実態と考察 —私立幼稚園における専門家による子育て相談の記録から—

安永 正夫*1

キーワード：幼稚園、子育て相談、子育て支援、専門家

1 はじめに

急激に進行する少子化の問題がさげばれるようになってから久しい。その背景には社会の情勢がめまぐるしく変化し、都市化、核家族化が進んだ結果、子どもを生み、育てるということに負担や不安を強く感じるような生活環境となっている現状がある。このような状況の中で、幼稚園や保育所が地域の子育て支援の拠点となることが期待されている。平成17年1月の中央教育審議会の答申¹⁾「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」において、幼稚園・保育所等施設が中核となり、家庭や地域社会と共に幼児教育を推進することを提唱している。幼稚園においては、平成20年に改定された幼稚園教育要領²⁾の中で、幼稚園が地域の幼児期の教育のセンターとしての役割を果たすように努めることが明文化されている。これを受け、幼稚園では「預かり保育」、「子育て相談」、「未収園児向けの支援」を中心とした子育て支援活動に取り組んでおり、文部科学省の平成26年度幼児教育実施調査³⁾の結果によると、公立園で86.4%、私立園で86.8%という高い割合で子育て支援活動が実施されている。これは、平成21年度と比べて5ポイント近くの増加となっており、より一層の活動の充実が目指されていると考えられるだろう。

望月ら⁴⁾(2013)の調査によれば、2003年の時点から母親の約8割が「保育者から何らかのアドバイスがほしい」と考えており、「子育て相談」のニーズが高いことがうかがわれる。しかし、先の文科省の調査では、「子育て相談」については「幼稚園教職員」によるも

のは公立園で67.4%、私立園で55.4%であり、十分とはいえない。また、「カウンセラー等外部の人材」によるものでは公立園で31.1%、私立園で21.7%となっている。

このように、子育て支援の重要性が認識されながらも、荒牧⁵⁾(2016)が指摘するように子育て支援がどのような効果をもっているのかを検討した研究はまだ少ない。また、福田⁶⁾(2011)は子育て相談に関する研究が少ないことと、中でも幼稚園の教員以外の専門家による相談についての研究がほとんど見受けられないとしている。そこで、本研究ではこれまでの子育て相談の実態についての研究を整理し、さらに実際の専門家による子育て相談の記録から、子育て相談のあり方について考察することを目的とする。

2 子育て相談に関する研究

これまでの子育て相談に関する研究を整理する。

立石ら⁷⁾(2004)は全国の91の幼稚園の園長に対し、子育て支援の実施状況や内容を尋ねる調査を行っている。子育て相談については、48の園(52.7%)が実施しており、実施していない園においても自由記述で「日常的に行っている」等の日常的なかかわりの中で相談に応じている様子が示された。また、丹羽ら⁸⁾(2006)は全国の29の幼稚園の園長に対し、同様の調査を行っている。子育て相談については、25の園(86.2%)で実施されており、調査時期が2005年であることを考えると、文科省の調査と比べて高い水準で行われていることがうかがわれる。二つの調査において、相談の担

*1 至誠館大学 ライフデザイン学部

当者は園内の担当者が行っていることが多く、園外の専門家が担当している園は2割から3割程度であった。相談内容としては、「子どもの友だちとの関係について」や「子どもの身体やこころの発達・くせ等について」、「子どものしつけ」についてなどの内容が多い。また、「他の保護者との関係について」も多く、「自分自身の生き方について」など、子どものことのみにとどまらない幅広い相談内容が見受けられる。子育て相談についての認識については、「保護者の不安やいらいら、悩みが減る」、「保護者が子どもとのつきあいかたを見直せる」など、園は子育て相談の必要性や保護者への有効性を強く認識していることがわかった。

荒牧ら⁹⁾ (2004) は、全国の幼稚園の保護者に焦点をあて、「預かり保育」、「子育て相談」、「未就園児向けの子育て支援」の3つを中心に利用の実態を調べ、さらに育児不安との関連を検討している。子育て相談については、利用者が全体の1割程度にとどまっておらず、登園・降園の際の立ち話とは異なり、改めて相談となると敷居が高くなってしまふ可能性が考察された。また、内容も「園での子どもの生活」や「子どもの友だち関係」など幼稚園に関わる事柄が多く、「子どものしつけ」や「子どもの教育」などのどちらかといえば家庭に重点がおかれるような問題についての相談は少なく、幼稚園に関連のないことでの相談相手として園の職員を選ばないことが示されていた。しかし、相談した後の感想では、「利用してよかった」や「また利用したい」とする保護者は6割以上となっており、概ね満足しているという結果だった。育児不安との関連は、子育て相談を含め、子育て支援を利用したいと考えている人は利用する必要性を感じていない人よりも育児不安が高かった。育児不安が高い保護者が子育て支援への関心が強いことから、子育て支援の必要性がうかがわれる。荒牧ら¹⁰⁾ (2006) の行った二度目の調査では、質問表現を「子育て相談を利用したことがあるか否か」から「幼稚園の先生に相談することがあるかどうか」と改めたところ、半数近くの保護者が相談した経験が

あると回答した。相談時の状況としては、「送り迎えのとき」が全体の約7割であり、「保護者会・懇談会」、「連絡帳で」のように、日常的なやり取りの中での相談が多いことが実態として明らかとなった。

岩藤ら¹¹⁾ (2007) は、子育て相談の形態と保護者の精神的健康との関連を検討している。ここでは、子どもが一人である場合と二人きょうだいの長子が園児ある場合に相談利用が多いこと、子どもが一人である場合は園が重要な相談先となっていることが示されている。また、相談形態については、これまでと同様の「日常対応」や、「面接とグループ」での利用が多く、相談実施形態が利用しやすさと関連していることが示された。また、「面接とグループ」と、専門家が関与している園においては、相談に対して保護者の評価が高かった。

中山ら¹²⁾ (2014) は保育相談支援の利用のしやすさと母親の育児感情についての関連を検討した。保育所や幼稚園の相談支援を「利用しやすい」と感じる群は、「相談しづらい」と感じる群よりも「子育て充実感」が高く、「子育て不安感」、「子育て負担感」が低いことが示された。保育相談が育児不安などのネガティブな育児感情を軽減し、育児への充実感を向上させる可能性が示唆されている。

高畑¹³⁾ (2014) は保護者を対象に幼稚園の子育て相談に関するインタビュー調査を行い、質的分析によって子育て相談の役割について分析している。そこでは、子育て相談が母親の孤立を防ぐことや、幼稚園内での相談は他機関での相談に比べて相談しやすいこと、担任と母親をつなぐつなぎ手としての役割があることなどが示唆された。

荒牧¹⁴⁾ (2016) は子育て相談の効果を検証するために、子育て相談の利用頻度と母親の育児不安の関係を分析している。ここでいう子育て相談は幼稚園教諭に対する相談であるが、興味深いのは、母親の育児不安を「親自身の子育てのあり方への不安感(親不安感)」と「子どもの発達・育ちに対する不安感(子不安感)」

に分けて分析を行っている点である。子不安感は子育て相談の利用によって有意に軽減されていたが、親不安感については相談の利用頻度による差が認められなかったのである。荒牧はこれについて、幼稚園教諭には親としての役割や適性についてよりも、園の集団生活の中での子どもの姿などを知っている専門家として、子どもの発達や育ちについて助言してほしいという期待を持っているのではないかと考察している。そして、専門的な知識を押し付けようとするのではなく、子どもの育ちや発達について適切な情報を提供しつつも、親自身が自らの子育てを自然に振り返ることのできるような、間接的な助言が親不安感を軽減させるためにも効果的ではないかとしている。

これまでの研究をまとめると、全国の保育園・幼稚園では子育て相談の必要性が認識され、積極的に子育て相談が行われているが、その相談の担当者は多くが園内の教職員によって行われている。そして、保護者の立場からは、実際の利用の割合はそれほど多くないが、特に育児に対して不安が高い親が利用を希望しており、子どもが一人の場合や二人きょうだいの長子が園児の場合について相談利用が多いことも関連するだろう。相談内容については、子どもの生活の様子や発達・発育など、子どもに関することが多いが、他の保護者との関係や親自身についての相談も見受けられる。また、相談形態も登園・降園時などの日常場面の方が相談の利用がしやすく、相談しやすい環境は子育ての不安感や負担感の軽減や充実感とも関連しており、親の孤立を防いだり、園との連携を強めたりと重要性を再確認できる。ただし、幼稚園教諭による子育て相談では、親自身の子育てのあり方への不安を十分に軽減できない側面もあり、その意味で幼稚園教諭とは違った立場から間接的な助言ができる外部の専門家による相談が機能する可能性がある。

3 幼稚園における子育て相談の実際

3-1 対象園の概要

山口県内の私立幼稚園。子育て支援事業として預かり保育、未就園児保育、子育て相談などを行っている。また、英語、音楽、サッカーなどの課外教室も行っている。なお、対象園は福田⁹⁾(2011)と同一である。

3-2 調査方法

子育て相談の記録によって相談者、当該子どものきょうだい関係、相談内容について分類整理した。相談記録の整理、まとめについては先行研究を参考にした。

3-3 調査結果

(1) 相談事業実施形態

2005年7月より、休園期間を除いた1ヶ月に1回程度、幼稚園にて相談希望の有無を文書により調査し、希望がある場合に実施している。また、幼稚園のホームページ上に「子育て相談日」を設け、在園児・未就園児の保護者を対象に行っていることを明示している。

相談担当者は長年にわたり幼稚園に勤務し、付属幼稚園の副園長をつとめた経験を持つ園外の専門家(1名)であり、2007年より大学教員として勤務している。一人当たりの相談時間はおよそ30分程度であり、料金は無料であった。

(2) 相談件数の推移

2005年7月から2016年6月までの相談ケース121件を本研究の対象とした。相談件数の推移を表1に示す。年度あたりの相談実施回数は5~7回であった。一回あたりの相談件数が2回前後で推移している。2009年度から2012年度の4年間は一回あたりの相談件数が2件を越えており、相談事業の定着がうかがわれる。なお、本研究で用いられるデータは福田(2011)で対象とされた2011年までのデータに新たに2016年までのケースを加えたものである。^{註1)}

(3) 相談者

121件はすべて当該園に在園している子どもの保護者からの相談であり、うち1件は祖母による相談、1件は両親からの相談であった。残りの119件の相談者は母親であった。同一対象児についての継続相談者は16名であった。

表1 年度ごとの相談件数の推移

年度	相談件数	1回あたりの平均相談件数
2005年度*	6	2
2006年度	12	1.71
2007年度	11	1.83
2008年度	8	1.14
2009年度	14	2.33
2010年度	13	2.17
2011年度	14	2.8
2012年度	16	2.29
2013年度	9	1.8
2014年度	8	1.6
2015年度	6	1.2
2016年度*	4	2

*2005年度は7月からの実施で、9ヶ月間で相談実施回数は3回、2016年度は6月までの3ヶ月間で相談実施回数は2回

(4)当該子どものきょうだい関係

当該子どものきょうだい関係について、きょうだい数と出生順位をまとめたものを表2に示す。なお、継続して相談を受けている場合も相談ごとにカウントしている。前述のように対象児がひとりっこと二人きょうだいの長子である場合は相談する割合が高いとされるが、本研究でも二人きょうだいの長子の割合が多いことが分かる。ひとりっこの割合は少ないが、記録にきょうだい関係が未記入の場合があり、不明としたため、そこに含まれている可能性が高いと考えられる。

(5)相談内容

相談内容の分類については、福田（2011）を参考とした。項目の分類と相談件数を表3に示す。相談内容例については、実際に相談された例を示しているが、項目上はあるものの相談を受けなかった例については

福田に倣い一般的な相談例をあげている。1件の相談

表2 当該子どものきょうだい数と出生順位

きょうだいの数	出生順位	件数	割合
1人	ひとりっこ	6	5.0%
2人	長子	48	39.7%
	末子	10	8.3%
3人	長子	7	5.8%
	第二子	11	9.1%
	末子	0	0.0%
不明		39	32.2%

で複数の内容について相談をしている場合は、内容ごとに分類しており、合計が相談件数の121件を超え、138となっている。

相談内容は「発育・発達」に関することが多く、中でも「性格」や「社会性」、「発達障がいに関すること」が多くなっている。また、「育児方法」の中で「しつけ・教育」に関することも多く、子ども自身についての相談が多くなっている。しかしながら、「生活環境」について、「親自身・夫婦関係」に関することなど、親自身の悩みも多い。

相談内容についてさらに詳細に検討するために、出生順位と相談内容の関係を表4に示す。長子においては「育児方法」の相談が多いが、第二子では1件とかなり少なくなっていることが分かる。これは福田の結果とも一致している。

(6)相談への対応

相談に対する対応に関しては、相談内容や相談者自身の状況がさまざまであるため、分類することが難しい。しかし、基本的には長年子どもと接している立場から、専門的なアドバイスと共に、相談者の不安に寄り添った対応を行っていることがうかがわれる。例えば、二人きょうだいの長子の相談として「今まで一人でできていなかったことができなくなった」、「甘えるようになった」といった例があげられるが、「その子だけのお母さんとなるように」といったアドバイスを行

ったり、発達障がい疑われるケースについては、発達障がいについての説明や専門機関の紹介などを行いながら、親の不安に寄り添い「なるべく子どもの良いところをみる」のような助言を行ったりしている。先行研究でもあるように、母親の育児不安には子どもの発達・発育についての不安と共に、親自身の育児のあ

り方に関する不安が存在することが考えられる。両者は独立して存在するわけではないため、この両方の面から相談を受け止めていることが重要であり、実際にそのように対応を行っていることが読み取れる。

表3 子育て相談内容の分類と相談件数

分類項目		相談内容例	相談件数	合計
基本的 生活習慣	睡眠	・寝つきが悪い ・夜泣きが激しい	2	15 (10.9%)
	食事	・偏食	4	
	排泄	・一人でできない ・夜紙おむつが外せない	7	
	その他	・動作が遅い ・着替えが遅い	2	
発育・ 発達	歩行	・おすわりができない ・歩行の遅れ	0	58 (42.0%)
	身体の発育	・首のすわりが遅い ・体重が増えない	0	
	言葉	・言葉の遅れ ・どもり ・言葉づかいが悪い	7	
	社会性	・母親から離れて遊べない ・友達と遊べない	9	
	性格	・乱暴 ・我が強い	23	
	くせ	・指しゃぶり	6	
	発達全般の遅れ ・発達障がい	・広汎性発達障がいかもしれないと言われた	9	
	その他	・小学校へあがるにあたって気をつけること	3	
生活環境	親自身 ・夫婦関係	・離婚 ・父親の育児態度 ・母親自身がストレスフル	21	36 (26.1%)
	きょうだい関係	・きょうだい喧嘩がひどい	4	
	その他家族関係	・祖父母と母親の不和	0	
	友達関係	・幼稚園にいきたがらない ・女の子をたたく	8	
	近隣・地域	・ご近所との付き合い方 ・他の母から子どものことを悪く言われる	3	
育児方法	健康	・薄着 ・日光浴	0	21 (15.2%)
	しつけ ・教育	・注意の仕方が分からない ・習い事にいきたがらない ・言うことをきかない	21	
その他		・これまでの相談のお礼 ・特に相談はないが、自分の視野を広げたい ・兄（小学生）の登校拒否	8	8 (5.8%)

表4 当該子どもの出生順位と相談内容の関係

	基本的 生活習慣	発育・発達	生活環境	育児方法	その他	合計
長子	6	20	19	14	0	59
第二子	3	10	8	1	2	24
ひとりっこ	0	7	0	0	0	1
不明	6	21	6	6	6	48

また、相談に先立ち、子どもや保護者の様子について説明を受け、相談終了後には相談対応者から内容について説明を行い、相談記録用紙に記入をしている。相談記録用紙には「その後」として相談後の様子を記録する箇所も設けられており、その後の様子が分かる子どもや保護者に関しては記録がとられ、フォローが行われていることがわかる。

3-4 考察

対象園での専門家による子育て相談について、先行研究と比較しながら考察を行う。

まず、利用頻度についてである。対象園での相談件数は、一回あたり2件前後であった。2009年度から2012年度の相談は比較的多く、相談事業の定着がうかがわれるが、その後は1回当たり2件を超えない程度で推移している。他の機関で行われる相談に比べて幼稚園での相談は利用しやすいことが先行研究によって示唆されているが、登園・降園時や連絡帳などの日常場面における相談に比べると、改めて予約を行い相談することの敷居の高さがあると考えられる。すなわち、悩みはあるが改めて相談できないという親も潜在的に存在することが考えられ、そのような親が専門家による子育て相談を利用しやすくなるような環境づくりはひとつの課題となる。

次に、相談の利用と出生順位の関係であるが、本研究でも先行研究と同様に二人きょうだいの長子についての相談が多かった。ひとりっこについては、きょうだい関係の欄に未記入の場合に記入漏れなのかひとり

っこなのかの区別がつかないため、「不明」とした中に含まれている可能性が高く、そうであれば先行研究と一致する結果である。育児に対する不安の高さと相談の利用の関係が間接的にかがわれたといえるだろう。

相談内容については、先行研究同様「発育・発達」についての相談が多いが、福田も指摘するように、「発達障がい」についての相談が多い点は特徴的である。近年発達障がいについての関心が高まり、専門家による相談であることが相まって相談件数が増えていることが考えられる。また、「育児・しつけ」についての相談や、「親自身・夫婦関係」についての相談も多く見られた。出生順位と相談内容の関係では、長子と第二子で「育児方法」に関する相談件数に差が見られ、先行研究とも一致する結果である。

先行研究では幼稚園の多くが園内の教職員による子育て相談を行っていることが示されているが、園内の教職員ではない専門家による相談ということの利点についても一度整理しておきたい。まず、先行研究からもわかるように、専門家に対しては幼稚園教諭とは違った相談内容となる可能性である。幼稚園教諭に対しては子ども自体に目を向けた相談が多いが、専門家に対しては、育児やしつけ、発達障がい、親自身のあり方についての相談など、専門的な知識や経験に基づいたアドバイスを求めることができると考えられる。また、相談内容が多岐にわたることと関連して、日常的に接する幼稚園の教職員には相談しづらいことも、外部の専門家であれば相談しやすくなることが考えら

れる。さらに、佐藤ら¹⁵⁾(2013)は別の観点から幼稚園における専門家による子育て相談の利点を指摘している。佐藤らは大分県の別府市内の幼稚園の保護者に対して質問紙調査を行い、子育て相談のあり方に関して考察を行った。その中で今後の幼稚園の子育て相談のあり方について、相談専門家とともに子育て相談を行うことによって幼稚園教諭の相談技量の向上を図ることができるとしている。専門家による子育て相談の多くは月に数回程度であり、子どもや保護者と関係を築くのはあくまで幼稚園教諭が中心となる。日常の子どもの様子の理解と専門家の相談技量を取り入れることができれば、子育て相談の質が向上されるだろう。

最後に、今後の課題として相談記録の有効活用についてふれておきたい。先行研究や本研究からもわかるように、子育て相談の内容や、対象児の出生順位などの情報は、今後子育て支援を充実させるために重要なものである。また、園内での教職員同士や、外部の専門化との連携を図るためにも有用であると考えられる。本研究で用いた相談記録もそれに資するものであるが、より有用なものとするためには、記録の改善が必要であるように思われる。具体的には、相談内容の分類について、相談者が何を問題と感じているのかを把握できるような工夫などである。例えば、相談者が「子どもが乱暴で困っている」という場合、相談者は子どもの育ちについて不安を感じているのか、親としての育児方法に不安を感じているのか(あるいはその両方なのか)分かりづらい。多くの親が子育てについて感じる不安をより具体的に理解するためには、まず親自身がどこに不安を感じているのかをより詳細に明らかにする必要がある。また、本研究では相談内容と同じように専門家のアドバイスを分類して整理するにはいたらなかった。相談は多種多様であるが、そのアドバイスに共通する部分や相違する部分をより詳細に分析することも、相談を受ける親にとって、そして日常的に子どもと接しながら親の相談を受ける幼稚園の教職員にとってもプラスになると考えられる。ただし、記録

を煩雑にすることによって子育て相談に対して負担を感じてしまうとすればそれは本末転倒である。より使いやすく、より充実した記録の方法を検討することは、今後の研究の課題といえるだろう。

[註]

註 1 本研究のデータは福田(2011)で用いられたものとその続きのデータであるが、まとめなおした結果、2011年までの重複箇所において人数や分類に若干の違いがある部分が存在する。しかしながら違いは若干名であり、研究としての大意には影響しないと判断した。

[参考文献]

- 1)文部科学省；中央教育審議会「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」答申，
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013102.htm, 2005.1.28. (最終アクセス日：2016年11月10日)
- 2)文部科学省；幼稚園教育要領
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/
(最終アクセス日：2016年11月10日)
- 3)文部科学省；平成26年度幼児教育実態調査，
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/10/1363377.htm, 2015.10.28. (最終アクセス日：2016年11月10日)
- 4)望月彰・工藤英美・山本理恵；保育園・幼稚園における子育て相談と親のニーズのズレ—全国調査(保育・子育て3万人調査)の経年比較より—，人間発達学研究，4，47-61.
- 5)荒牧美佐子；幼稚園における子育て相談の効果検証—育児への不安感を指標に一，目白大学総合科学研究，12，35-43，2016.
- 6)福田みのり；私立幼稚園における子育て相談の実践と今後の展望—専門家による子育て相談の実践から—，山口福祉文化大学紀要，5，101-107，2011.

- 7)立石陽子・安藤智子・岩藤裕美・丹羽さかの・金丸智美・荒牧美佐子・堀越紀香・砂上史子・無藤隆；幼稚園における子育て支援の実態調査，お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要，2，27-37，2004.
- 8)丹羽さかの・安藤智子・岩藤裕美・立石陽子・荒牧美佐子・砂上史子・堀越紀香・無藤隆；幼稚園における子育て支援の実態調査(2) (2005年調査)，お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要，3，17-29，2006.
- 9) 荒牧美佐子・安藤智子・岩藤裕美・丹羽さかの・立石陽子・砂上史子・堀越紀香・無藤隆；幼稚園における子育て支援の利用状況—育児不安との関連から—，お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要，2，17-26，2004.
- 10) 荒牧美佐子・安藤智子・岩藤裕美・丹羽さかの・立石陽子・砂上史子・堀越紀香・無藤隆；幼稚園における子育て支援の利用状況 (第2報)，お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要，3，9-16，2006.
- 11) 岩藤裕美・立石陽子・安藤智子・荒牧美佐子・丹羽さかの・砂上史子・堀越紀香・無藤隆；幼稚園における子育て支援—幼稚園における「子育て相談」の形態と保護者の精神的健康との関連から—，お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要，4，27-34，2007.
- 12)中山智哉・渡邊望・春高裕美・木山徹哉；母親の育児感情に影響を及ぼす要因の探索的検討—母親の育児方法・育児への省察および保育相談支援との関連—，九州女子大学紀要，50(2)，15-29，2014.
- 13)高畑芳美；子育ての「主体」である母親を支援する幼稚園の役割，保育学研究，52(3)，355-364，2014.
- 14) 前掲5)
- 15)佐藤慶子・阿部敬信・菊池香奈恵；幼稚園における子育て相談のあり方に関する考察—別府市内幼稚園の保護者に対する質問紙調査から—，別府大学短期大学部紀要，32，19-26，2013.

[謝辞]

本研究にあたり、相談記録を提供していただいた園長先生と、教職員みなさまに感謝申し上げます。また、対象園の紹介などにおいて多大な助力をいただいた至誠館大学の国広勝代先生に感謝いたします。